



花恋（かれん）

家に帰ると、ポストにエロ本が投げ込まれていた。

俺はとっさに佐伯の顔が思い浮かんだ。

「あのやろお〜！」

俺がたまたま今日バイトなくて、

早く帰ってきたからよかったものの、

そうでなけりゃ

母ちゃんか姉きに

先に気づかれるところだった。

せめて、人にモノ返す時は一いや、

こうゆうもんだから・・・だけどー

何か袋に入れて返すのが男の常識ってもんだろ！

俺が貸す時は、ちゃんと

教科書とノートの間にはさんでサンドイッチ形式で

貸してやっただろ。

と毒づいた。

いや、あの時は

学校だったから、

人に見られたら自分が困るから

だけど。

「ページとページ、くっついてないだろうな」

慎重に確かめながら、

めくっていく。

巻頭カラーは

八木ルミだ。

ルミちゃんの

おっぱいの線をそっと指でなぞってみる。

そこへ、

突如携帯がなりはじめたので

俺は全身がビクッとなった。

いや、携帯なのだから、
なにもビビる必要はなかったのだ。

画面には

「花恋（かれん）」と出ていた。

「もしもし・・・」

それでもなぜか低い声になり、そっと出た。

「もしもし～拓海（たくみ）？」

何してんのお～」

静かな海を打ち破るような声。

「いや・・・別に・・・」

「今日、バイト休みでしょ～

今から行ってもいい？」



グラコロデート

「あーやっぱり、マクド。
マクドにしてくれる？」

「あ、駅前の？
わかった。わかったけど、
マックって
言ってくれない？
マクドは大阪人の言葉よ」

「いいじゃん、別に。
しかも通じてるし。
何関東人ぶってるんだよ」
「だって、私、横浜生まれ。」

なんだか、俺はカチンときた。
大阪に親戚のおばさんがいるからだけではない。

「まっ。いいわ〜。グラコロ食べたかったから。
だけど、ハッピーセットのおもちゃ欲しいから、
私のチーズバーガー食べてね。」

「ええっ？ナゲットにしとけよー」
「あ、わかった、わかった。
ナゲットセットにするから。よろしく！」
花恋は機嫌よく電話を切った。
俺は重い腰を上げて
チャリンコにまたがって
駅まで走った。

おっとー。チャリンコなんて言葉使ったら、
また花恋に叱られる。
大阪のオバサン言葉だ、って
前も言われた。

人生16年、大阪のおばさんには
いまでこそ年に数回会うだけだけど、
小さい頃の影響力って

大きいんだから、仕方ないじゃん。

それに、大阪って結構おもしろいねんで。



草食男子の本音

「ねえねえ、このあとゲーセン行こう」
花恋がもうなくなったシェイクのストローを
吸いながら、言う。
ストローが吸い込みすぎて折れ曲がっている。

—またプリクラかよ。
俺は折れ曲がったストローと
プリクラの機械が重なって見え、ウンザリした。
いったい何枚写真撮ったら気が済むんだろ。

気がついたら、プリクラの前にいた。
本当に俺は断れない性格で、
自分で自分が嫌になる。

「ハイッ！ポーズ」
パシャ。
「次、3.2.1で、キスしよー。」

—ああ・・・またかよ。
3.2.1・・・その瞬間、俺は花恋の後頭部を
グッと引き寄せ、
思いっきりブチューっとかましてやった。
そのまま続けてると
3枚目のシャッター音が下りた。

「拓ちゃん。ちょ、ちょっと待って・・・」
プリクラの中で、エスカレートする俺に恐れをなしたのか、
外で待っている女子高生のスカートからのぞく足が6本だったのが
恥ずかしさを覚えたのか。
軽く俺の胸を押し返した。

—嫌なら、こんなとこ、誘うなよ。
中途半端なんだよ。

最後はフツーに肩組んで撮った。
外に出て、しばらくすると
落書きタイムがはじまる。

「ねー。拓ちゃんも書いて」
—もう、いいよ。そんなの。
ていうか、俺は半分ついてけなくなってる。

毎回来るたびにバージョンアップしてて、
デカメだとか、女優肌だとか、
いろんなキラ文字やラメもじやイラストなどが
うごめいている。
それらをどう使ってどうすりゃいいのか、わからない。
しかし、そのどれも俺は言葉に出せないまま、
花恋の
落書きを横目で見ながら、見ているだけだ。

「あっ、ワンピースのフィギュア取りに行こっ！」
落書きの終わった花恋が走っていく。

しかし、3回500円はあっけなく終わり、
もう今日はこれでとりあえず帰ろうということになった。
「ねー。今度の日曜、どこか行こうよ」
花恋が言ってきたが
「あ・・・今度の日曜はバイト終日入ったんだ」
嘘だった。



英語の授業

3時間目は英語の授業だった。

白のブラウスにピッタリとしたタイトなスカート。
満願寺先生は、いつも清楚なスタイルを崩さない。
いつもブラウスは白と決まっている。
ブラウスを通して、
ぷくっとしたふたつのふくらみが
盛り上がっているのがいい、
と佐伯はいつも言う。
俺はブラジャーの肩ひもが透けて見えるのがいいかな、
と
思うが口には出さない。

「今日はこの曲を聞いてもらいます」
先生はCDコンボを持ってきていた。
なんだか昭和歌謡のような
古臭い曲が流れてきた。

♪見てたはずよ
あたしの気持ちが
すこしずつあなたのほうへ
傾いてゆくのを
見てたはずよ

女が恋にあげたものなど
どうでもいいけど
しめつけられる
人を愛する真心だけはね。

—なんだ、これ。
日本語じゃん？
今、英語の授業だろ？

クラスみんなも
変な顔をして聞いているもの、
無関心を装って無気力になってるもの。

とりあえず、音楽が聞けて気分転換になって
喜んでももの、さまざまだった。



先生のカミングアウト

「それでは、この曲を英訳してください」
満願寺先生は、歌詞が書かれたプリントを
列の一番前の席に座っている人に
枚数分置いていった。

プリントには、今聞いた歌詞が書かれている。
—これ？これを英訳って・・・
それが授業？
変なことするな・・・

俺は今聞いた曲の歌詞を目で追っていた。

その後
先生は、授業にCDコンポを持ち込んで、
それが隣のクラスに響くような音だったことで
学年主任のガメラから叱られたらしい。
ガメラというのは、俺たちがひそかに付けて呼んでいるあだなであり、
数学担当の流咲先生だ。

しかし、俺はそんなことより授業中にふと漏らした
先生の声のほうがかかっていた。

クラスの子が
「先生、何これ？
この古そうな曲」と言った時のことだ。



先生の秘密

「あーこれ。先生の思い出の曲なのよ。
スリーディグリーズの『にがい涙』って曲なの」
「にがい涙？永ちゃんじゃなくって？」
「あらー。また、そんな曲よく知ってるね」
満願寺先生は、目を輝かせて
「この曲はね、
70年代にはやったのよ。昔付き合ってたの人が好きだったのよ」
そんなことをいきなりカミングアウトするなんて、
それに、70年代って・・
そんなに古い曲を好きだった人につきあってた・・て
一体何歳の人と？
もしかして、俺らのオヤジたちより、
年上の人と付き合ってた、て
計算になるんじゃ？

俺の頭の中は満願寺先生のこと
でマンタンだった。



体温を感じる

「日曜日、汐入駅に11時」

そんなメモを満願寺先生
からもらったのは
2週間後だった。
いや、正確に言うと
小テストを返却された時に、
俺の名前の横に鉛筆で
走り書きがしてあった。
渡す時、ごく小さな声で
「消しといて」と言われたので、
ナンノコトダと
思っていたら
コノコトダッタ。
先生やるなあー。と
思いながら、俺はそっと先生の文字を消しゴムで消した。
そのあとをそっと指先でなぞった。

日曜日、俺はバイトも変更して
11時に汐入駅で待っていた。



一何で、俺きたんだろう？
そんな思いがチラと胸をかすめた。
しかも、あんなメモにまんまとひっかかって。
先生、ほんとにくるんだろうか？
「吹井君」
ふいに、遠くから声がしたような気がした。
iPodをしていた俺の肩をたたいた人がいた。
先生だった。
「何聞いているの？」
先生は俺の右耳から
イヤホンを抜き取ると自分の左耳につけた
「AAAね」
「あっ、先生知ってるんだ」
「知ってるよー。それくらい。
でも、はじめはエーエーエーってなんだろう？って
思ってたんだけどね」
「あそこに車とめてるから」
少し離れた道路の脇に先生の車が止められていた。
先生が右側を歩くと道路側になるので、
俺は先生の左耳からイヤホンを抜き取って、
右側に回った。
こんどは自分の左耳からイヤホンを抜いて
先生の右耳に入れてあげた。
自分の右耳からは

先生の体温が感じられた。

先生とデート

「乗って」

先生の車に乗り込む。
助手席に乗ることなんて、
子どもの時に家族で出かけた時以来だ。
先生が横目で俺を見る。
先生が動くと、動きに伴い
甘い香りが漂ってくる。
花恋（かれん）の香りとも違う。
花恋はいつも、果物シリーズで
いちごやパイナップルなどの香りの
ヘアワックスをつけている。
先生のこの香りはいったいどこからくるのか。
全身から発光されているような気もするし、
なんだか胸の間からフェロモンが出てる気もする。



CDが流れてきた。
あの歌だ。
英語の授業の時に聞かされたあの古臭い歌。

♪見てたはずよ、あたしの気持ちが
すこしづつあなたのほうへ傾いてゆくのを
見てたはずよ・・・

「この歌・・・英訳できた？」
「できねーよ、んなもん・・・」
俺はブスツとして言った。
「それに、先生、授業中に
音楽かけた、っていつて
この授業自体、打ち切りになったじゃん」
「よく知ってるねー」
クラス全員が周知の事実なのに、
しらじらしく先生がにこやかに言う。

天使のささやき

「天使のささやきって知ってる？」

「しらねー。そんな古い曲・・・」

先生は構わず続ける。

「あれさ。。タイトルと曲の歌詞、あってないのよね。

この・・・スリーディグリーズってひとたちが

歌ってるんだけど・・・あ、かかってきた」

曲が変わった。

「これこれ・・・これ天使のささやきって曲」

「なんだ、英語じゃん」

「そうよ・・・英語なの。。

ていうか、この方たち、もともと3人グループの

アメリカのかたたちなのよ。

あの、授業で使った曲は、

日本語で歌ってただけなのよ」

「へえ～」

「日本人が歌ってるように聞こえたでしょ？

で、この英語も、すごいキレイでしょ」

「んー。英語はどれも、全部同じに聞こえる」

「そんなことはないよ。

英語の発音、上手になると、キスだって

うまくなるわよ」



俺は便利屋かよ

車は郊外にある大型家具店に乗り入れた。

「ここで、ちょっと付き合っほしいものがあるのー」

つきあって・・・という言葉に

なぜかドキッとした。

「こういう、大型のものを買っても、家に運びこむのって大変でしょ？」

なんだよ、運び屋かよ～？

先生と俺は、

1Fから4Fまである家具や雑貨などを見て回った。



先生はその中で気に入ったテレビボードとチェストを買うといった。

それらはすべて

組み立て式になっていて、

運び込むのと

ついでに俺にそれらを組み立てて欲しいとやってきた。

運び屋について

組み立て屋かよ？

「ま、いいことあるよ、きっと。」

俺の心を見透かしたように先生はほほ笑んだ。

笑うと唇の際に小さなえくぼができるんだな、と

初めて知った。

先生と俺

俺は先生の部屋でひたすら家具を組み立てた。

「ありがと！」

先生はほっぺに軽くチュ！としてくれた。

一吹井拓海16歳の秋だった。

それから先生は、あっけないくらい

学校では全くの知らん顔を決め込んでいた。

他の生徒たちと同様の扱いで

—それは、あたりまえすぎるくらいあたりまえなことで、

そんなことはわかりきっている、と頭ではおもっているのに。—

しかし俺はそっけなくされるたびに

ジリジリとした。

先生からは、時々メールがきたが、

それも拍子抜けするくらいのあっさりした

ものだった。

「寒くなってきたので豚まん食べました」だの、

「去年着ていたコートを出しました」だの

日常の日記のようなメールを一方的に送ってくる。

しかし、それに俺が返信しても

先生からは何の音沙汰もない。

「先生、メールのルール。知らないんじゃないの？」

思わずそう書いてやったら、

5時間くらいたってから、『ルールって何？』

とかえってきた。

その間、ずっと俺は携帯片手にテレビを見、

風呂に入る時も脱衣所に携帯置いて

音がなるたび、確認しにいていたというのに。

返信はしないでおいてやった。



先生と寝た日

しかし、その日は意外に早く訪れた。
冬休みに入る3日前、
期末テストも終わってのんびりしていた俺に
先生からメールがきた。
また、いそいそと汐入駅まで
1時間もかけて行った。
先生が迎えにきてくれていたが、
家まで車で40分もかかる。

「もし見つかったらヤバイでしょ」
ただそれだけの理由と、

駅に車が止めやすいという
ことだけで選んだようだ。

先生の家に入ると
俺がこの間必死になって作った
テレビボードとチェストが
あたりまえだが置いてあった。

ミニテーブルに
ミルクティーが置かれた。

半分も飲まないうちに
唇を寄せ合った。

先生はフロントホックだった。

俺はよくわからなかった。
「いまどき、こうゆうのないでしょ。」

先生は自分からはずした。
中から白桃のような
先生の乳房がぼわんとでてきた。

ずっと教室で見ただけの

先生のブラのヒモが
目の前にあった。

俺は力強く吸った。

先生の中は温かった。
花恋とは
全然違うな、と思った。
俺はいまんところ、
花恋しか知らないけど、
女って
それぞれ違うんだな、と
思った。



テーブルの上のミルクティーは
すっかり冷えていた。

「じゃあ、またね」
先生は、また
40分もかけて
回り道をして駅まで送ってくれた。

つい、さっきまで
同じベッドの中にいた
男と女にはとても見えない風を装った。

装ってるのか、
先生がもともとこうなのか。
俺にはよくわからない。

先生はいつもより

化粧が薄かった。

今日はどうす化粧にしているのか、

俺と寝たから化粧がとれたのか。

俺はよくわからなかった。

花恋とのペアリング

花恋が部屋に遊びにきた。

俺が座ってるその上に重ねて座ってくる。

「ねー拓ちゃん・・・」

花恋は俺の手を取って、

自分のひざの上にのせ、さらに手のひらを重ねてきた。

「なーんか、拓ちゃん。最近冷たいんですけど？」

そうって全体重をかけてくるように、

しなだれかかってくる。

花恋の甘い髪の毛の香りが、

俺の鼻孔を圧縮する。

ずっと変わらない・・・この香り。

俺は両手を花恋の髪の毛の中に入れ、

手ぐしでとかすようにした。

花恋は、その右手を

持って自分のスカートの生地の下に

もぐりこませた。

「ねー拓ちゃん。

花恋のこと、好き？」

上半身をねじって上目遣いで見つめてくる。

こうやると自分が可愛く見えることを

彼女はわかっているのだ。

「好きだよ・・・」

「ホントに？」

「うん・・・」

花恋の頭に左手を置いて優しくなでる。

「私・・・頭ナデナデされるの、

すごい好きなんだー。」

花恋は、両脚を空中に伸ばしたり、ちぢめたりした。

そしてひざの上に置かれた右手の薬指にある

リングをもてあそびはじめた。

つきあって

1年記念に買ったペアリング。



「でも、それは拓ちゃんだからだよー」

俺の頭の中には先生が浮かんできた。

二人の女の間で

花恋とは、仕方がないのであれから一度だけ映画を見た。それも、恐ろしく退屈なB級ホラー映画で「悪魔の毒々モンスター」というタイトルさえも古臭い、内容もシロウトが見ても合成まるわかりのひどいものだった。でも、時折花恋がずっと腕をつかんできたり、そのまま指先のほうに移動してきて手を絡ませたりしてきたので、ギュッと握り返した。



花恋とつきあいながらも、先生の部屋にも呼ばれれば相変わらずいていた。

あくまで主導権は先生にあり、俺のほうからデートに誘うことはなかった。また、誘ったとしてもきっと断られただろう。断られるであろうことがわかっていたから誘わなかったのか。

いや、もともと俺は自分から誘うこともできない性分だ。

花恋とのつきあいも、つきあいはじめはさすがに俺のほうからコクったけれどそれは男としてのプライドというか、はじめをつけたかったからだ。その後の主導権はほぼ花恋であった。それがずっとラクでもあったのだが、

このところはそれが少々ウザくなってきた。

思わず叫んだ

1月の終わり。

俺はまた先生の部屋にいた。

「ねえ・・・今日はコレね」

いつも手渡されるコンドームの袋。

先生はあからさまに堂々と渡してくれる。

「あのさー。男がコンドームつけてる後ろ姿って
まぬけだね」

先生はベッドシーツを目の下まで
すっぽりかぶってケラケラ笑いながら言う。

「えっ？」

俺はあわてて振り返る。

「あーダメダメ。

振り返った姿のラインはますますみっともないから」

みっともない、なんて言われ俺は激昂した。

激情のあまり、

先生を少々手荒な扱いにしてやった。

「あーイタイよ・・・それ・・・」

先生は眉間にしわを寄せて顔をしかめた。

「あのね・・・おっばいはね・・・

下から上に・・・ゆっくりやってくれる？」

「はい・・・」

「はい、なんていいのよ」

また、先生はケラケラ笑っている。

やっぱり主導権はとれない。

笑いを封じようと

その口を口でふさぐ。

ずっと・・・したくて・・・したくて・・・

会いたくて・・・したくて・・・

先生から抜いたとき、
「アレ？」
一瞬で現実に戻った。
最後に何か感触があった。

はじめての感覚。
数少ない体験でも
こんな風ははじめて。

コンドームを処理してる時。
俺は驚愕した。
「やぶけてる・・・！！」



チラッと後ろをふりかえると、
まどろんでる先生の顔があった。
先生にこのことを報告しようかどうしようか。
迷いながらティッシュに包んでゴミ箱に投げ捨ててやった。

☆.....*☆*.....*☆*.....*☆*.....*☆*.....*☆*.....

「それ、ヤバイんじゃないのぉー」
悪友である佐伯に
絶対誰にも言うなと念押しして、
このコンドームやぶれ事件を打ち明けた。
相手は花恋ということにした。
「イマドキ、そんな破れるような粗悪品あるか？」
今の時代に考えられないが聞いてみた。
「さぁーしらねえ。だけど、普通はよっぽど
女の長くのびた爪で
さわっても破れねえよ」
「そーだろ？聞いたことないよ」
「あ、相当激しかったとか・・・イヒヒ」佐伯はうれしそうだ。
「激しい・・・て・・・いったいどの程度？」
しかし、それにしてもそれでも大丈夫だろ？」
「あっ！」
佐伯は切れた電球がふいにもちなおして、突然ついたような顔になった。
「なんか、きいたことあるぜー。最近・・・
破れるコンドームっていうの。
「破れる・・・て・・・破れたら意味ないんじゃないの？」
「そーなんだよ。意味ないんだけど。
AV限定で、そういうのあるらしーんだよ。」
「お前、よく知ってんな」
しかし、もしそうならば、
先生が何を目的で
それを使ったのか。
一体何のために？そして何よりどうやって入手したのだろうか？
俺は全くわからなかった。
「絶対、このこと誰にも言うなよ」
俺は再度佐伯に口封じした。

「はいはい、わかってますよおー。
でも、気をつけろよ。ふ・き・い君」
佐伯はまたニヤニヤしていた。



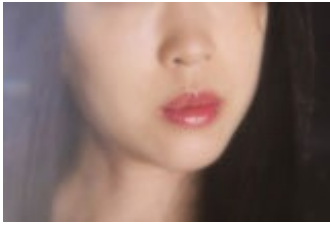
Shrut

魔性の魅力

「学校では絶対知らん顔をすること」

先生と固く約束した取り決めである。
実際、今のところ俺と先生のことを知っているものは誰もいない。
先生と初めてデートした最初のころ、
学校での先生のあまりにそっけない態度に、
肩すかしをくったようであじけなかった。

しかし、先生曰く
「そーゆー関係になった男と女というのは
どんなに隠しても絶対周囲にバレるから」と言われた。
その後しっかりそーゆー関係になってからは
俺は今まで以上に無表情、無関心を装った。
しかし、そうすればするほど
それがまた周囲に
気づかれるきっかけになるのでは、と
ヒヤヒヤした。
そしてまた。こんな気持ちを抱えながら
花恋ともつきあい、そのことが息苦しかった。
かといって、花恋を捨てることもできない。
花恋のことは花恋で好きだし、大切にしたい気持ちもある。
しかし、先生のオトナの魔力にも引き込まれていた。



二人の狭間で

「二人とも好きなんてありえないっ！」

俺は姉貴の言葉に、

釣り上げられた魚のように

背骨がビクッとはねあがった。

姉貴はテレビに向かって、

二股騒動を起こしている砂糖谷翔に叫んでいたのだった。

「ホント呆れるよね～

二人とも同じくらい好きなんて・・・」

「いや、俺はわかる。わかるよ、砂糖谷君。

君の気持ちが・・・

俺は不肖にも実際には年上である

タレントの砂糖谷君に心から同情申し上げた。

「自分で二股おこして泣いてるってどうゆうこと？

意味わかんない・・・

自分が悪いんじゃないっ！」

姉貴はまだブツブツ言っている。

「違うんだよ。姉貴。あの涙は・・・

男は言うに言えない心の底に抱えた

気持ちがあるんだよ。

でも、それは今は世間に対して言えない。

言えないもどかしさ、悔しさ。

あー女にはわかんないんだろーなー。

俺は、二人を選べないもどかしさ、

自分の優柔不断さを憂える一方で、

多少の優越感も感じていた。

どっちかを選ばなきゃなんないのか？

選ぶ必要とかあんだろか？



ズルイ男

先生とはだんだん会う間隔があいてきた。

それというのも、

相変わらず俺からは連絡とれず、

先生が主導権握っているからだ。

先生に会えない空虚感を花恋で埋めていた。

でも、どうしても違っていた。

何かが違っていた。

いつも、先生と花恋を比べてしまっていた。

花恋とベッドの中にも、

いつも先生の顔が浮かんできた。

花恋はいつも痛がった。

いつもいつも我慢しているようだった。

でも、以前はそれでもよかった。

その我慢はそれだけでなく、

また別のことまで我慢してるように、俺には見えた。

花恋に集中できない俺がいた。

—何か・・・違う・・・みたい・・・最近・・・

花恋がつぶやいた。

—こんなに、拓ちゃんが近くにいても・・・

すごい遠い感じがする。

花恋が俺のほっぺを下から両手ではさんだ。

そんなしぐさをさせてしまう花恋に罪悪感を感じてしまう。

どうしようもなかった。

—拓ちゃんって、いつも自分のこと、何も

話してくれないよね・・・

花恋は右手を俺の左胸にあてた。

—拓ちゃんの心の声が聞けたらいいのに・・・

花恋・・・もう俺たち、友達にならないか？

そう言いたかったがやっぱり言えなかった。

友達って・・・友達ってなんだろう？

友達になる、って言い方、すごくズルクないか？

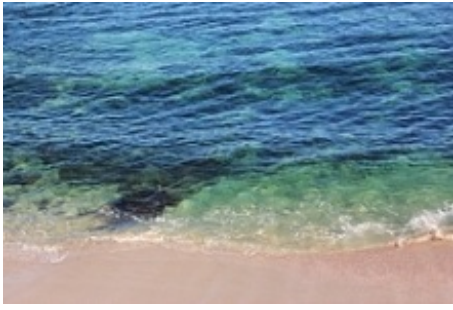


欲望という名の海

でも、一人を選ばなきゃならない。
理由なんてどこにもない。
二人を好きで、何が悪い。
これは、裏切りなんかじゃない。
どっちもほんとに好きなんだから。

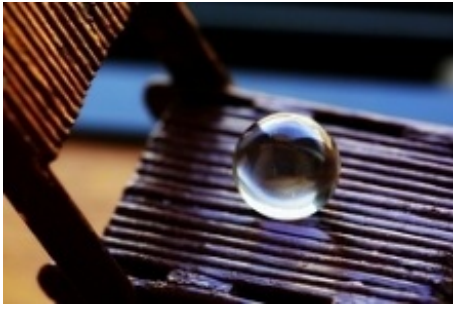
そういえば、この間姉貴が読んでる
漫画を暇つぶしに読んでたら
二人の女と同時につきあってて
やっぱり決めれない男がでてきた。
拳句の果てには
「ジャンケンしてほしい！」なんて
叫んでた。あの気持ちもわかる。
姉貴は激怒してたが・・・
それにしても・・・
俺って二人とも好きなんだろうか？

正直に考えるとわからんなってきた。
好きって・・・なんだろう・・・？
俺ってただ欲望に
流されてるだけかも。



花恋からの電話

花恋からはしょっちゅうメールが届いた。
一日に何十通も届き、
そのひとつひとつに
とても返信してられない。
日常のなんでもないことを
書いてきたり、それらを
デコってキラキラさせたり
絵文字がふんだんにはいつたり。
目がチカチカしてくる。
きっこうゆうの、本人は可愛いとおもって
自己満足してるんだろうな、とは
思うが俺は出来ればこうゆうのは
女同士でやってもらいたい、と
常々思っていた。
そうして、
連絡事項のみ「了解」とか
短く返信すると
「会社みたいでそっけない」といつてきた。
ある日、ついに電話がかかってきた。



別れ話

「なんで、メールくれないの？」

「うん・・・まあ・・・別に・・・ちょっと・・・」

俺は、わけのわからない言葉を連ねて

うやむやにしようとした。

「なんか変！」

しばらく沈黙が続き、電話の向こうからは

なんだか鼻をグズグズいわせてる音が聞こえてきた。

あ一。。めんどいな・・・

そう思ったら相手にも

それが伝わったようで。

「私のこと、ウザイとおもってるでしょ！」

予想通りの言葉がかえってきて、

ますます本当にウザくなってきた。

「花恋・・・もう、友達にならないか？」

反射的に言葉がついて出た。

「何よ・・・うざいから？」

こうやってウダウダいう子も

きっと余計うっとうしいんだよね。

自分でもそれ、わかってる。でも、

どうしようもないんだよ！」

花恋は、本当に泣きだした。

「あの・・・そうゆうのじゃなくて・・・

2年になると、受験勉強とかあって、

そうゆう体制に入らないといけないし・・・」

俺はもっともらしい言い訳をした。

「受験！って・・・
中学の時、受験の間もずっと励まし合いながらも
つきあってきたじゃん。
花恋がいるから、頑張れる・・・て」

そうだった・・・
しまった・・・

「私、ずっと拓ちゃんのこと好きで。。中2のときから・・・
だから3年になって、
拓ちゃんからコクられた時、本当に幸せだった。。
でも・・・本当に純愛って・・・
片思いのときだけだったのかも。」

純愛？なんだよ、それ。

「相手にこうしてほしい、とか
こんなことってほしい、とか
そういう要求ばっか増えちゃって、・・・だから
私のことウザくなったんでしょ？」

えっ？何いってんだよ、花恋。
俺はややこしい話はそれこそウザイ。

「あのさ・・・とりあえず・・・
今花恋は取り乱してるから・・・
今度ゆっくり会って話しよう」

「今度・・・ていって、そのままにしようって
魂胆でしょ？」

事件

「いや・・・そんなことは・・・とにかく・・・
今日はこれで・・・」
俺はあわてて電話を切った。

○●○●○●○●○●

そうして、やはり花恋とは
連絡を取らないまま
日々が過ぎウヤムヤになりつつあった。

先生からも連絡はなかった。
学校ではもちろん見かけるものの、
俺は約束通り素知らぬふりを続けていたのだ。

しかし、突然事件は起きた。

先生から電話がかかってきた。
「あのね・・・吹井君。
今・・・いい？」
いいなんて、わざわざ聞くなんて。
こんなことははじめてだった。

俺はバイトの帰り、
夜。駅のホームに一人でいた。

「いいですけど・・・」
無意識に人目をさけるように歩きだした。
「あのね・・・私・・・妊娠した」
先生はまるで
八百屋で大根を買ってきたようにこともなげに言った。
「ニンシン・・・」
それは、半分予想してなかったことではなかった。
覚悟もしていた。
しかし、あらためてその言葉を現実に聞かされると
とても自分の身に起こった出来事とは思えなかった

事件の結末は

「産む・・・の？」

俺は震える声で聞いた。

そんな言葉を今、自分が発していることさえ信じられない。

自分の声が自分の声では

ないくらい、

遠くに感じる。

「あたりまえでしょ」

こともなげに先生が言う。

「そう・・・だよな。」

「でも・・・心配しないでー。

吹井君には、なァ～んにも迷惑かけないから。

認知しろ、とか将来どうとかいわないし・・・。

なんてったって、まだウラ若き16歳の青年！だもんね」

先生はまるで先生らしくなく、

明るさを装っているだけのように

聞こえた、

俺は、まだ何もかも整理されていない。

頭の中が

ぐるぐる回っていた。



恋の波動

花恋が一カ月ぶりに突然家にきた。

「拓ちゃん・・・話があって・・・」

中途ハンパなの、ヤだし・・・」

俺は何をどう話されるのか、どきまぎした。

「拓ちゃんのこと・・・ずっと・・・この空白の間

考えてた・・・」

「うん・・・」

「で、やっぱり私はどうしたって

拓ちゃんのこと好きなんだな～って・・・おもった・・・」

「・・・う・・・ん・・・」

「でも・・・永遠の愛なんてないんだよね」

花恋は膝をつきあわせにきた。

「永遠の愛なんて、なくていいから

ずっと拓ちゃんに私のそばにいてほしい」

俺は言葉が返せなかった。

花恋のことは花恋で好きなんだ・・・きつと・・・たぶん・・・

でも、それは以前の好きなんていう

気持ちとは変わってきてる。

俺には先生という存在があり、

その先生は・・・

俺は何と答えたらよいかわからなかった。

まさか、先生とのことを

花恋に話すわけにも

いかない。

話したって、どうなるんだろう？

「拓ちゃん・・・他に好きな人・・・できたの？」

唐突に花恋が聞いてきた。

俺は反射的に首を振っていた。



今度こそお別れ

「なら・・・！！」

花恋の顔が

パアッと明るくなった。

「花恋のそばに、ずっと・・・ずっといて・・・」

花恋は俺の首に腕をまきつけにきた。

「あ・・・違うんだ。・・・ダメ・・・なんだ・・・」

ダメなんだよ・・・」

「えっ？」

花恋は、腕をふりほどき

子猫のような目で見つめてきた。



「もう・・・花恋とは・・・つきあえないんだ」

「なんで？なんで？どうして？」

花恋は叫びながら、俺の胸をどんどん叩いた。

そして、俺の左胸に左耳をつけ鼓動を聞きはじめた。

「拓ちゃんの心臓の音・・・聞こえる・・・」

拓ちゃん・・・嘘ついてるね・・・」

花恋も知らない、誰も知らない嘘」

目をあげて涙のたまった目で見上げてくる。

「ウソツキ拓ちゃん。

もう、今日でほんと一っにおさらば。

もう、今後やらせてください、なんて

いってきてもぜ一ったい、やらせてあげないよ一っだ」

先生の退職

学校で見る先生は、いつもと何も変わりはない。
妊娠した、なんて言っただけで女の人って
どれくらいからお腹が大きくなるものなのか？
そんなこと、間違っても誰にも聞けやしない、
佐伯にだって。
いや、佐伯だっていくらなんでもそんなこと知らないだろう。

☆.....*☆*.....☆*° ° *☆*° ° ° *

3学期の終業式のあと、
簡単に離任式があった。
先生たちが並んでる、
その中に満願寺先生の姿を見つけた。
俺は喉の奥の奥で
あっと声をあげてしまった。
どうやら
俺の声は、外には出ず、
寸止めでいてくれたことが助かった。
「満願寺先生は、退職されることになりました」
校長が淡々と紹介している。
退職？タイシヨク・・・？

そうして先生から連絡はプツリと途絶えた。
もともと、こちらから電話しても一切でない、という
勝手なことをされ続けてきた俺だけど
それに甘んじてきた俺だけど、
それでもごくたまーに電話はあった。
それが本当になくなった。
仕方がないので留守電にメッセージ入れたり、
メールもしたが一切返事はなかった。
俺はおあずけくらの犬か、
サーカスの綱渡りに失敗して足首だけ
かろうじてひっかかり、
さかさまに宙ぶらりんになっているピエロのようだった。



忘れられない先生

「なあ～佐伯。女って妊娠したら、

いつくらいから

体型かわるものなん？」

俺は思い余って聞いた。

「ニンシンって・・・！お前、まさか・・・？」

佐伯の顔色が変わった。

「いや・・・違うよ、違う。たとえばだよ、

た・と・え・ば・・・の話」

「さぁーよくわかんねーけど、5.6カ月くらいからじゃねーの？」

佐伯はまだ何か含みを持たせたような、

疑い深いまなざしを俺に向けた。

5.6ヶ月か・・・俺は指折り数えた。

佐伯はそんなことより・・・と

いった風情で

「お前・・・もしかして・・・前だった、コンドーム破れ事件？」

「いや・・・違うんだよ・・・」

「何が違うんだよ。違う、違うって。」

又佐伯はニヤニヤしている。

春休みに入り、暖かい日が時々やってくるが、

まだまだ春には遠く冷たい空気が

襟元をかすめていく。

俺の心のような。

見上げた空と空の間に一筋の雲が流れている。

雲がちぎれて二つに分かれた。

しばらくして、もうひとつの雲はまた近づいていってるように

みえた。



俺は、絶対かかってくることのない携帯を

何度も何度も開けては閉じ、開けては閉じ・・・を繰り返した。
そして、返ってくることはないだろうメールを
再び送った。

—そうだ！先生の家に行ってみよう。

ふと思い立った。

どうしてこんなことに今まで気づかなかったのだろう。

ものすごく単純なことなのに、

ものすごく名案に思えた。

俺は汐入駅まで行った。